

血液製剤の使用指針 V 新鮮凍結血漿の適正使用 新旧対照表

| 項目 | 改定案 | 現行 |
|-------------------------------------|---|--|
| <p>V 新鮮凍結血漿の適正使用 7. 使用上の注意点</p> | <p>1) 使用法 新鮮凍結血漿を輸血する場合には、輸血セットを使用する。使用時には 30～37℃の恒温槽中で融解し、<u>融解後直ちに必要量を輸血する。直ちに使用できない場合は、2～6℃で保存し、融解後 24 時間以内に使用すること。融解後 24 時間の保存により血液凝固第Ⅷ因子の活性は約 3～4 割低下するが、その他の凝固因子等の活性に大きな変化は認められない。なお、2～6℃で保存した本剤の急速大量輸血、新生児交換輸血等の場合は、体温の低下や血圧低下、不整脈等があらわれることがある。</u></p> <p>なお、製剤ラベルの剥脱を避けるとともに、バッグ破損による細菌汚染を起こす可能性を考慮して、必ずビニール袋に入れる。</p> | <p>1) 使用法 新鮮凍結血漿を輸血する場合には、<u>ろ過装置を具備した輸血用器具（輸血セット）</u>を使用する。使用時には 30～37℃の恒温槽中で融解し、<u>融解後 3 時間以内に必要量を輸血する。</u></p> <p>なお、製剤ラベルの剥脱を避けるとともに、バッグ破損による細菌汚染を起こす可能性を考慮して、必ずビニール袋に入れる。</p> |